
Tears in Heaven

小鳩ヒナコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tears in Heaven

【NZコード】

N4609D

【作者名】

小鳩ヒナコ

【あらすじ】

「わたしたちはきっと、地獄に墮ちるよね……」。精神疾患の薬物依存に苦しむ19歳のアズミと28歳の亮平。切ない涙のラブストーリー。

第一話(玉露ご) (前書き)

ケータイ小説用に書いた物語を転載しています。
難解な文章や表現を削るのに苦労した作品です。

第一話（出発）

1月の初め、しんと静まる寒い日に、ぼくはギターを弾いていた。空はくもつていて、雪が降りそつた。ここ作業療法室には、誰もいない。ぼくは、この精神病院で、いま診察待ちをしているところだった。

ガシャーーンと、ガラス細工のように壊れてしまつたぼくのじ
ひる

ぼくは少し涙を浮かべていたかも知れない。ふとぼくは、外に人の気配を感じた。

「それ、なんの曲？」

顔を上げると、窓の横に高校生くらいの女の子が立っていた。優しいクリーム色のコートに、バーバリーのマフラー。彼女は整つた美しい顔だちに、どこか品のよさをたたえていた。

「禁じられた遊び」

「それってなに？」

「ふるーい外国の映画」

「ふうん。どんな？」

彼女は、セミロングの髪をゆらした。

「子どもが、一人でいけないことする話」

「なんていいかげんな答えなんだ。」

「なにそれ……」

「最後は、女の子と男の子は、離ればなれになるんだよ」

「ええ？」

と彼女は予想外のびっくりを見せた。

「悪いことしたんだから、しょうがないよね」

ぼくは、あまり考えずにそう言った。

「そつかあ……」「

「え?」

「それで、わたしも……」

彼女は、クリーム色のコートをひるがえして、ドアの外へ出て行った。

いつたい、なんだつていうんだ?

「さぶつー。」

外に出ると、いまにも降り出してきそうなグレーの空だった。
ぼくの病気は、原因不明だ。

2年前突然、胸に激しい痛みを覚えて、あちこちの病院へたらい回しされ、結局、精神科に落ち着いた。つまり、ぼくの病気は『ころの問題だ』というのだ。精神科医も困った様子で、とりあえずぼくに鬱病の薬を出したが、ぼくの胸の痛みは、いつだってズキズキとおさまる』とはなかつた。

「まあいいや。向精神薬Rさえあれば」

ぼくは目をつぶつて、薬局で順番をじっと待つた。《ピンポン!》と薬局の電光掲示板の音が鳴る。番号札を出し、ぼくは薬の確認をする。すると、ふいに後ろから肩をとんとんされた。

「あのそれ、わたしの薬なんんですけど」

え? と振り返ると、そこに、さつきの美少女が立っていた。

「ほら、番号。85番はわたしのよ」

「えつ? ? !」

ぼくはあわてて、薬袋と番号札を確認した。薬袋には、確かに《篠田アズミ様》と書かれてある。

えええ? ! ぼくみたいに、馬なみに薬を飲むやつが、ほかにいるのか。

ぼくは驚きながらも、彼女に「『めんつ』と謝つた。

篠田アズミは、にこりと笑つて、それから語った。

「ふうん…兄さんも患者さんだつたんだ」

「…え？」

「てっきり、作業療法士さんかと思つた。ギター上手かつたし」

そのとき、隣の窓口でピンポンが鳴つて、ぼくのほんとうの番号札
86番が示された。あたふたと、ぼくは薬を受け取る。その間に、アズミはコートを着込んで、カサ置き場で自分のカサを捲して
いた。それで、カサを持たないぼくと彼女は、ちょうど同じタイミングで外に出ることになった。

外は粉雪が舞つていた。

..

ぼくは時折、空を見上げながら歩いていた。すると突然、アズミが振り返つて言つた。

「ちょっと、ついてこないでくれる？」

「へ？」

「だからー、わたしの後をついてこないでつて」

「ぼくも、そっちの方向なんだよ」

「えええーー?！」とアズミは叫んだ。

「あんなさびれたバスに乗つてる人、わたしのほかにもいるの？初めて聞いた」

「ぼくは、そのバス路線のK停留所に用があるの」

「えええええーーーーー！」とまたアズミが驚いた。

「うそ？！じゃ、わたしと同じじゃない！！」

ぼくも彼女も、同時にびっくりした。

ビショツとその横を、車が通り過ぎていく。

狭いガードレールの内側を、黙つて歩いているわけにもいかないので、ぼくは後ろからアズミに話しかけた。

「あのとき、なんですか出て行つちゃつたの？さつまぼくがギターを弾いてたとき」

「だつてわたし、自分のことを言われたみたいで」「え？」

「悪い」としたんだから、離ればなれになつても仕方ないよねつて

「それ、映画の話でしょ」

「でも、タイミングよすぎ。つい最近、別れたんだよね。中学生のときからつき合つてた彼と」

「そつか…」

「彼もギターが好きだつたなあ…」

「アズミ、それで眠れなくなつちゃつたの?..」

「ううん、それが原因じゃない」

「彼女はきつぱりと言い切つた。

「眠れなくなつたのは、別の理由」

「…あまり詮索しないでおくよ」

「うん。ありがと」

ぼくらはK停留所に着いたのも、同じ方角を歩き、結局、一緒にとある精神病院に着いてしまつた。それだけで、ぼくらは、自分たちの置かれている状況が理解し合えた。

「なんだ、二人とも病院ハシゴしてたのか」

ぼくはつとめて明るく言つたが、アズミは呆然としていた。

「…兄さんも……中毒患者だつたんだ」

つまりぼくらは、一つの病院で出してくれる薬の量では、とても足りないくらいこの苦しみを抱えていたことが、だつた。

「アズミ…、ぼくら、いけないことしてるとね」

「うん…、薬物依存つていつの?わたし、親に隠すのが大変でさ」

「アズミ、歳いくつ?..」

「19歳」

「ぼくは28歳。行徳亮平。《亮平》でいいよ」

「亮平」

とアズミはつぶやいた。

思えばそのときから、ぼくはせせやかな共犯者になつていたのだ。

診察後、大量の薬を受け取ると、ぼくらは待ち合わせたようにバス停へと向かった。

あたりはすでにほの暗い冬の街並みだった。

ぼくとアズミとは少しばかり歳は離れているけれど、背丈はなんだかしつくりぐるな、なんてぼくは不謹慎なことを考えていた。アズミはアズミでまた、なにか別のことを考えているようだった。やがてアズミは、下を向きながらポツリと言つた。

「ねえ。わたしたち一人ともいけないことしてゐるわけだからさあ」「うん」

「もし、わたしたちが友だちになつても、いつか離ればなれになるつてことなのかな?」

「え?」

思いもしないことを突然言われて、ぼくは返事が出来なかつた。

アズミは、ぼくの胸元を見ていた。

「ねえ、亮平。わたし、今まで誰にも言わなかつたんだけどさ」「うん」

「それでもわたし、眠れなくてほんとうに辛いの。　わかつてくれる?」

「ぼくもだよ。よくわかるよ」

アズミの瞳が、そのとき初めて真正面からぼくをとらえた。彼女の空白の透き通つた瞳に、ぼくはどきりとした。

バス停の黄色いライトが、雪明かりににじむ一人の姿をぼんやりと照らし出していた。

第一話（光と暗闇のなかで）

「アズミと出合つたその夜、ぼくは部屋でパソコンの前にいた。

『ギター大好き…の集まり』

ぼくは、そのチャットルームの常連で、そこでみんなとギターを演奏したり、近況をログで話し合つたりしていた。

『つき、わたしが弾いてもいい? (、・・) 』

『ドゾー』

『コーディと一緒に弾くよ?..』

『おくですー』

ハンドルネーム : s a y a _ x x x t k o . j u 2 0 0 0 は、ここにカッフルになり、一緒に住んでいる。

二人は、サヤとコーディと呼ばれていた。

『 8 8 8 8 8 8 』

演奏が終わると、みんなで拍手した。

『つき、誰?』

『ぼく、いいですかー?』と k e n t a 4 0 4 (ケンタ) が書き込んでくる。

ケンタがラブソングを弾き語り始めたので、

『彼氏ほしーよ~・。(*つ^*)・。』と m i l k _ h i m e 7 0 1 (ミルク) が泣いた。

そのとき、サヤがぼくにそつとプライベートメッセージを送つてきました。

『亮平。ミルクが誘つてるよ』

『なんだよ、それ』

『ミルク、こないだ亮平に会つてみたいって言つてたから』

『あいつ、誰にでもやつらがいるじゃないか?』

『それはないでしょ』

『そりゃかな』

『でも、オフ会したら絶対来るよ、あの子』

『オフの予定あるの?』

『なにけど』

『サヤがにやつと笑うのが想像できた。

『でもさ、亮平の胸の痛み、カノジョでまた消えるかもよ?』

ぼくは、アズミのことを想つてギッとした。

『彼女がいるいないは関係ないってば···』

『でもモトカノと別れたときからなんでしょう? その痛み』

『モトカノのことは何もつけられた』

『チャンスなのに···』

『チャンスじゃないよ』

『どして? 会えば気が変わるかもよ?』

いや、いまのぼくにそれはない。

『サヤとコージみたいに、誰もが上手くいくわけじゃないだい』

『イヤイヤ。それがね(···; ···)』

『なんかあるの?』

『コージ、誰かと浮氣してるって噂あんの。』

『まさかー。嘘だ』

『なりいいケド』

そのとき、ケンタの弾き語りが終わり、みんなで8888と拍手した。

『いいね~』

『+。 d (・・・) 。 +。・・・ * イイ』

『アリガト (@。・・@) 。・・・』

次々ログが流れしていく。

『よかつたよーゝケンタ』とぼくも書き込んだ。
ラブソング…、カノジョか…。

アズミとは、また病院でばったり会えるんだろうか。

『さて、ぼくもがんばつて練習しようつと』

『あれ？落ちるんですかゝ亮平』

『うん、明日早いからな』

ぼくは、嘘をついた。

さつきから、胸の痛みが、ズキズキとひどくなり始めていたのだ。

* * *

ぼくは、胸の痛みと格闘していた。

ズキンズキンズキン…。

苦しい。誰か、助けてくれ。

でも、誰もぼくの苦しみをわかってくれる人なんていない。

ぼくは、テーブルにあつたRを飲んだ。

これだけが、ぼくの痛みを2・3時間癒してくれる薬だつた。

「薬物依存ってやつ？」

アズミの言葉が思い出される。そうかも知れない。
そのとき、深夜だというのに、ケータイが鳴った。
「R、足ります？余りますけど…」
「いくら？」

「10粒8000円ではどうですか？」

電話の相手は、見も知らぬ女の子だ。精神科関係のチャットルーム

で偶然知り合つた。

「高いな」

「えへ、そうですか～？」

「いま足りてるから要らないよ

「じゃ、また今度ですねー」

電話の相手は用がすむとすぐ切つた。希薄な関係だ…。

ぼくは、寝返りを打ちつつ、いろんなことを考えた。
将来のこと。

ぼくは本来、IT関連企業に勤めていたが、それもいまは就労できない状態だった。

さらに一錠睡眠薬を飲んで、何度も寝返りを打つたあげく、ぼくはついに近所のコンビニへ行くことにした。

「眠れないときは、少し動いた方がいいんだ…」

コンビニへ着くと、ぼくは慣れた足取りで、雑誌コーナーへ向かった。

すると、そこには

奇跡のように、

アズミの姿があつた。

第三話（アズミの身の上）

「眠れないの？お兄さん。いい薬があるよ」とアズミがふさけて言った。

「いらないよ。もつ今日は眠れねえって決めたんだ」

「へんな日本語」

そういうながらも、彼女は「これ効くから」と薬を何種類か出してきた。

ぼくはそれを受け取った。なかにはRもあった。

いたずらっぽくアズミは田で笑つてみせる。

「じつは、薬のシートを捨てに来たの。家の『ミニ箱から見つかると大変だから。いつもコンビニで捨てる」

ぼくは、彼女も闇ルートを持つていらっしゃる気がした。

「ところで、その顔どうしちやつたの？」

ぼくはアズミの頬を指さして尋ねた。そこには出来たばかりの紫色のあざがあった。

「わたしね、さつき父親に殴られてきた」

「えつ？！」

「うちの家つて、最悪なんだよ…」

「よくあるの？」「うう」と

アズミは、トを向いてうなずいた。

「お父さん、女つくつちゃつてさ」

「……」

「夫婦でケンカばっかりしてるくせに、わたしには、就職しろとかなんとかうるさい言つてくんの。あれでもお父さん、警察官なんだよ。信じられない」

アズミは長いため息をついた。

「さつきもわたし、ケンカを止めようとしただけなのに……」

アズミは棚のファッショングッズ雑誌を横目で見ながら、ため息をついた。

イギリスは留学してた頃はよか一たなむ……たゞた1年間だけ帰つてきてから、家のなか、ますます冷え切つちゃつててさー

「イギリスに留学してたんだ?」

「お父さんから逃げるためには、だからわたし、英語は話せるよ」

「どうでもいいよ、そんなこと

アズミせわうに続けて言った。

とにかく、お父さんの教育は、殴つたり何時間も正座させたり、わけわかんないの。わたし、もう我慢できなくってさ」

それで、薬に頼るよつになつたのか、とせへせへの子で思つた。

「なあ、アズミー

「なに?」

「ぼくんち、来ない？」

アズミは笑つた。

「そんな簡単にについていかないよ」

あには「諺たよ」

「アスリを元氣にほむ」と思ひた。

『喜劇』『喜劇』『喜劇』『喜劇』『喜劇』
ターカー大好き！！の集まり』によくいるんだ。遊びに来てよ』

「うん。ありがと」

「下手なギターを聴かせてやるから。仲間もいるしな」

一
うん

「ほくは、アズミのメアドを聞きたくてたまらなかつたのだが、アズミが、「そろそろ帰らなきや」と言い出したので、チャンスを逃し

てしもつた。

まあ、いい。彼女が、チャットルームに来れば、いつだつてそれは

聞けるんだが、

「じゃ、送つていいのか?」

「いい、いい。すぐ近くだから」

「アズミ、『氣をつけてな』

「亮平もね。おやすみ」

「おやすみ」

「うつむく、ぼくらはコンビニの前で手を振りて別れた。

アズミのやのときの柔らかな手つきを、ぼくは決して忘れない。

第四話（アズミとぼくとギター仲間と）

3日後、アズミがぼくらのチャットルームにやつて來た。

彼女のハンドルネームは、x x a n u m i x x だつた。

ぼくがアズミを紹介すると、常連たちがさつそく詮索始めた。

『オオオオ　ヽ(*。　。)ノ　オオオオ　亮平のリア友！！』

『・・*・・ヽ(*。　。*)ノ・・*・・口ロスク　ゝアズミ』

『もしかして彼女？　ゝ亮平』

『え　まじか？　亮平』

『違うつて：・』

『ちがいますよー』

ぼくとアズミは、同時に恋人関係を否定した。

だが、ぼくのあたまのなかは、アズミのことでいつぱいだつた。

x x a n u m i x x のハンドルネームが、ぼくには光つてみえた。

『なんか弾いたら？　ゝ亮平』

ケンタにつながされ、ぼくは、イーグルスの”Hotel California”を弾き語りした。

『888888888』とみんなと一緒に拍手をしてくれたあとで、

アズミは、

『予想外に上手い』

とぼくをほめてくれた。それから、

『ねえ、コーディさんがなんか言つてくるんだけど』

とぼくにプライベートメッセージを送つてきた。

『コーディが？　なにを？？』

『なんか…ナンパみたいな。無視していい？』

『いい、いい。コーディはサヤの彼氏だよ。冗談なんだつて』

『リヨーカイ』

アズミと毎日のように接することが出来るのは、ぼくにとって最大の楽しみだった。

『亮平の歌声、わたし好きだよ』

『ありがとー』

『そのこと、サヤにも話したんだ』

『サヤとプライベートメッセージ?仲いいんだね』

『うん。このまえ、みんなの前で私のイギリス留学の話したりして?そしたらサヤさん、自分もいたことがあるって』

『へーー?』

『ちつちつに頃だつたから、英語だいぶ忘れたらしけど』『でもたしかに、発音いいよね』

『うん。サヤさん、イギリスを懐かしがつてた。』

『教えてあげれば?』

『うん!じつは住んでた場所も近いんだ』

『へー。ロンドンって狭いんだな』

そのとおり、ぼくのパソコン画面に、サヤからのプライベートメッセージがパツと出現した。

『ハローッ!』

『どつたの?サヤ』

『今日、病院行つて薬変えてきた』

『睡眠薬?』

『うん。でも、コーリーが車で連れてつてくれて楽だつたよ』

『いいなあ。ぼくんかいつも一人で淋しいよ』

『アズミ、誘えばいいじゃん』

『えつ』

『聞いたよ。あの子も、精神科通いしてるんだつてね』

『そこまで話したのか、あいつ』

『うちら、仲良しもんねー(@、ゝゝ人(^ ^)』

『どこまで知ってるんだよ……』

『女同士の内緒だよー』

『なんか怖いな』

『そんなことないよ。アタシ、亮平のモトカノの「」となんか言わな
いもんね』

『信じてるけど』

『アズミ、ここ子ちゃん。亮平、モノにしあやえー』

『なんだよ、そのモノって』

『カノジコにしあやえー』

そのとき、アズミが再びメッセージを送つてきた。

『ちよつとお母さんに呼ばれたから、落ちるね』

××××××××××××のハンドルネームが、パソコン画面から消えた。
ぼくは、かなり残念だった。いつものことだけれど。

『アズミ、落ちちゃったね』

サヤから再びログが流れてきた。

『うん』

『身体、しんどいのかなー』

『え?』

『アズミ、すこぐ悪いんでしょ~このまえ、飲んでる薬の量聞いて
ビックリしたよ』

ぼくは、なにをさうまで言つてこのかわからなかつた。

『やめさせないと。いつか死ぬよ。ふつうの人�んだら卒倒する
量じゃん?..』

『やうだけど……』

『病院ハシ「なんてよくないよ。アズミ、頭いいからそのへりこの
こと、わかつてるだるうに』

『うん……』

そう言われると、ぼくはキュウと胸が締めつけられたようだつた。

♪それでもわたし、眠れなくてほととぎすに辛いの。 わかつてく
れる?♪

初めて会った日の、アズミの真剣なまなざしを思い出した。
そこまで飲まなきゃ、眠れない苦しい日々を、いつたいどれだけの
人が送ったことがあるだろう。
ぼくは、アズミの苦しみは、ぼくにしか受け止められないのかも知
れないと思つた。

第五話（一人一緒に）

アズミと出会つてから一ヶ月半も経っていたのに、ぼくはまだアズミのメアドを知らなかつた。

『アズミ、メアド教えてくれる?』

翌日、ぼくは何気なさを装つて、こつものよつにチャットのログを打つた。

『いいけどなんで?』とアズミが尋ねてくる。

『今度、一緒に病院に行かないかなと思つて』

『そうだねー』

『どうせ待ち時間、退屈でしょ?』

『(。 。) (。 。) (。 。) (。 。) ウンウン』

『チャットだとすぐに連絡つかないしさー』

『うん。行こう行こう』

アズミは、すぐに自分のメアドを書いてきた。ぼくはケータイをつかみ、速攻メールを送つた。

『あ、いました』

『いつた?』

『おつけ

『これでいつでも話せるね』

アズミのログもどことなく嬉しそうだった。

『診察日、ちょうど明日だよね。何時にする?』

『じゃ、10時に 駅前とか?』

『うーじや。また変更あつたらメールするね』

『おく』

ぼくは、じぶらのなかで「YES!」といふしを握つていた。これからずっと、病院のあの退屈な待つ時間を、アズミと過ごせるんだ。

そのとき、手に持っていたケータイが鳴った。ぼくは、ピッとは即座に反応した。

「リョウヘイさん、こんにちわ」
電話の相手は言つた。それは、Rの売人をやつしている例の女の子からだつた。

「薬なら足りてるけど」

ほんとうはそうでもなかつたが、ぼくは彼女とはあまり付き合つたくなかった。

「いえ、そうじゃないんですよ」

「じゃ、なに?」

「リョウヘイさん、スニッフって知つてます?」

「スニッフ?」
「薬を碎いて、鼻から吸うんです。その方が効き目が長持ちするんですよ」

天使のよつなかわいい声で、女の子はくすくす笑つた。

「ただし、鼻水出ますけどね」

「それで、それがどうしたの?」

「その道具、要らないかなあと思つて」

「そんなもんまで売り始めたのか」

ぼくは少しあきれた。この子は、いつたいどんな生活をしてるんだろう。

「いえ、あたしの使いかけなんですけど…。べつに汚くないので。あたし、新しいの買つたからもつたいないなと思つて」

「いいつて。俺は要らない」

電話を切つたが、少し気になることがあつた。

…薬の効き目が長持ちする。…

正直、たつた2・3時間しか効かない薬を、一日何度も飲むのは気が引けたし、経済的にも辛かつた。でもそれだけは、手を出すべき

じゃない
…。

アズミはその日、例のクリーム色のパートの下にワンピースにブーツ姿で登場した。

「お。かわいー」とほめたら、「ビニがよ」と意外とアズミは反抗した。

ぼくらは、電車に乗つて、二人が初めて出会つた病院へ向かつた。今日は、このまえと違つてとてもいい天氣で、一人ともなんとなくワクワクしていた。

「ぼくさー。病院行くのがこんなに楽しいの、初めて」「わたしも」

「やっぱ一人だとしんどいよね」

「うん。待ち時間がいちばん気がめいる」「今日の待ち時間、どうする?」

「そうね~」

アズミは少し考えてから言つた。

「わたし、亮平のギターが聴きたい」

「おけ。じゃ、作業療法室だな」

ぼくらは、病院で診察券を出すと、すぐに作業療法室へ入つていつた。そこには、まばらに人がいたが、治療時間外だからかまわないだろうと、ぼくは思った。

「なにがいい?」

部屋のすみにあつたギターを取り出して、ぼくはアズミに尋ねた。

「このまえのやつ」

「えつ?また”禁じられた遊び”?いいけど、しぶい曲好みだねー」

「あれから、あの映画観てみたんだ」

「へえ」

「もうびっくり。す」「——く泣いた。ラストがかわいそすぎぬ」

「そっか。

じゃあ、ぼくのギターで、もひとつ、泣かせてあげましょっ
ぼくは、ギターを弾き始めた。アズミはぼくの隣にぴたりと座つ
て、じっとぼくの手つきを見ていた。ぼくは彼女の視線を感じて、
少し緊張してしまった。

窓から冬の陽が、やわらかく差し込む。ほこりがわずかに舞うなか
で、ぼくらは、ゆっくりとした時間を過ごしていた。

「ぱちぱちぱち。ありがとー。亮平」

「なんだ、泣けよ」

「あはははは」

アズミが明るく笑ってくれたことで、ぼくも幸せな気分になつた。

「そろそろ、様子見に行くか」

「うん」

アズミが立つ。ぼくも立ち上がり、彼女とぼくは、ちゅうどい
背丈のシルエットをつくる。

ぼくがアズミの瞳をとらえようとするといふと、彼女はすでにぼくを見て
いて、視線がぶつかつた瞬間、彼女ははつとその美しい瞳をまぶた
にふせてしまった。

そのとき、ぼくの中のなにかがぼくの背中を押して、ぼくはアズミ
の手をそつと握つた。

第六話（禁じられた遊び）

ぼくら一人は、まるで悪だくみをして遊んでいる子どものようだった。

病院でお互いの視線を見つめあい、手をつないで薬局へ歩していく。二人でおずおずと。禁断の甘い蜜への道のりを。

ある日、ぼくらは最後の薬局を出てから、こつものよつて手をつないで歩いていた。すると、アズミが突然言つた。

「ねえ、ちょっとカラオケにでも行かない？」

「カラオケ？」

「たまには、わたしにも歌わせてよ」

「それもそうだな」

「ちょっと、見せたいものもあるし」

「へえ。なんだろ」

ぼくは呑気に彼女についていった。そしてぼくらは、駅前にあった一軒のカラオケ屋に入つていつた。

部屋のソファに座ると、アズミはわざわざ、《見せたいもの》をバッグから取り出してきた。

「なにこれ？」

「スニッフ。スニッフの道具だよ」

ぼくは、目を大きく見開いた。

「アズミ、なんでこんなもの、持つてるの？」

「なんでって。ネットで売つてたから」

「おまえ、それ自分で使う気で買ったの？」

「えつ……」

ぼくは、激しく動搖した。

「つ、おまえ、バカか？！」

思わず、ぼくは大声で叫んでいた。

「バカつて」

「こんなもんで、薬吸いつもりでここに来たのかよ……」

アズミの身体が、ビクッと響いた。

「だつて……、鼻から吸うと、薬が長持ちするって書いてあったから……」

「怒ったの？ 亮平

「当たり前だ……」

「わたし……、わたしたちが、少しでも薬を減らせたらと思って」

アズミは、もう、半泣きだった。声がぶるぶる震えていた。
ぼくは、悲しさを抑えきれず、その道具を荒々しく壁へ投げつけてやつた。ガシャンと音がして、それらは床に無残に散らばった。

「ごめん……。亮平。ごめん」

アズミの目から、涙がぽろぽろとこぼれた。

「アズミ、もう一度ことことしないって、ぼくに約束してくれる？」

「うん」

「頼むから

「ごめんね……亮平」

アズミは、泣きやまなかつた。ぼくは、やりすぎたかなと思い、彼女に謝りたい気持ちになつてきた。

「……アズミ。もう怒つてないから」

「亮平」

突然、アズミの両手がぼくの腕をつかんだ。

「亮平、お願い。わたしを嫌いにならないで」

「嫌いになつたりなんかしないよ、アズミのことは、絶対。……」

それは、ほとんど告白だった。ぼくらはお互に見つめあった。アズミの瞳がうるんでいた。

ぼくは、アズミの手を、ぼくの腕からそっと離さず、ぼくの両腕で彼女の肩を包み込んだ。

やがて、アズミの顔をこちらに向かせると、震える身体を落ち着かせるよしみ、元気は彼女に口づけた。

第七話（緊急電話～マージンホール～）

カラオケ屋での一件のあと、ぼくはこままでいつもずっと、打ち解けあって話をするようになった。

「亮平の胸を痛がつてゐる、わたし見てられないわ」

「もう？」

「うん。 とせじき、すこしく辛さうな顔している」

「それを言つなら、アズミだつて」

「わたしのは、単なる睡眠不足だつたりするけど……」

「ぼくのは、気にすることないよ」

ぼくは、冬の公園にいた。

その日は、通院ではなく、アズミが会いたいとぼくに言つてきたのだ。

「立ち入った話を聞くよつだけどさあ」

「どうしたの？」

「その胸の痛み、モトカノと別れたときからなんでしょう？」

「え」

「サヤさんから聞いたの」

「ああ……あいつめ」

ぼくは、じうるのなかで舌打ちをした。

「そんなに、モトカノのこと、好きだったの？」

「まあ、好きだつたけど

「妬けちゃうなー」

「でも、いまはほんとになんとも思つてない」

枯れた噴水のところで、親子連れがハトにえさをやつていた。

「じゃあ、なぜ胸の痛いのが治らないのかな？」

アズミは、ほんやりと疑問を投げかけた。

「わからない。…別れた瞬間、ほんとうにガシャーンって音がして、

胸が壊れたみたいになつたんだ。その彼女とは、19歳のときから6年間つき合つてた。一緒に住んでたよ

アズミは、だまつておとなしく聞いていた。

「アズミ、ぼくのモトカノのこと、気になる?」

「うん…少しだけ」

「いまは、アズミのことしか見てないから」

アズミが顔を上げて、ぼくを見て笑つた。

「ねえ、亮平。わたし、お願いがあるの」

「なに?」

「辛いことがあつたら、わたしに、HマークHンシーコールして?」

「HマークHンシーコール? ?」

「緊急電話よ。もし、亮平の胸が痛くて、眠れないようなときま、コンビニに行くんじやなくて、わたしに電話して」

「うん」

ぼくは、素直にうなずいていた。

「そのかわり、わたしも辛いことがあつたら、亮平に電話する。それで、亮平に助けてもらつの」

「いい案だね」

「お互い、助け合おうよ。それでいつか…」

「こつか?…」

「二人とも、薬がなくても眠れるようになつたらいいね」

「そうだね」

ぼくは、それが決して夢ではないような気がした。アズミは、立ち上がつて、ぼくの手をうながした。

「薬に依存するのはいけないことだけど、わたしに依存なら、うれしいわ」

ぼくらは、手をつけないで、ベンチをあとにした。たくさんハト飛び立つた。ぼくは、今日の彼女のことを、天使みたいだ、とこうそりつぶやいた。

第八話（一人ぼっちの夜）

アズミが発案した緊急電話ハヤージュンシーコールは、意外と早く使われることになった。
アズミが、父親に殴られて怪我をしたのだ。

それは大雨の晚のことだった。

アズミは濡れた髪で、ぼくの部屋に逃げてきた。寒さでブルブル震えている。

ぼくは彼女に、転がっていたタオルと毛布をかけて、冷蔵庫にあつた牛乳をマグカップに入れて温めて出してやった。

「薬のシートが部屋に残つてて、それが見つかっちゃつたの。いろいろ聞かれて、返事をしなかつたら、お父さんがいきなり…」

彼女の切れた額には、すでに治療すみだつた。ここへ来たのは、病院から家に戻つたあとだと言う。

「家に帰つたと思ったら、今度はお母さんがお父さんとケンカ始めて。例の女人のことよ。一人とも、わたしのことなんか見てないの」

「ひどい目にあつちやつたね…」

「もう、わたし、あの家にいるの、イヤ」

アズミの言つことは、じゅうぶん理解できた。ぼくは、このままアズミを家に帰していいものかどうか迷つた。

「とにかく、少し落ち着いて。アズミ」

「落ち着くもなにも、無理よ！」

アズミは声をあげて泣いた。ぼくは、彼女の背中をさすつてやつた。かわいそうに。…なんてことだ。ぼくは、自分のこゝりまでが痛んだ。

「アズミ、泊まつていいくか？」

「…………」

「せめて、落ち着くまでここのにいなよ。家にはなんとか言って」

「…………つ……」

「できる?」

「…………んつ……」

「わかった。じゃ、電話して」

アズミは、しゃくりあげながらも、自分のバッグからケータイを取り出し、「今晚、優花のところに泊まるから」と言った。

「泊まりでいいの?」

「…………つうん……」

「おつけ。じゃ、リラックスして」

ぼくが彼女の肩をぽんぽんとやると、アズミはうそうそといふなずいた。

「大丈夫?」

「…………うん。」めん

「じめんなんていいから。ぼくら、助け合ひ仲だろ?」

「そうだね」

アズミが少し笑った。

「ぼくが、アズミを見守ってるから」

「ありがと」

「ぼく、アズミが笑ってる顔が好きだよ」

「うん」

「アズミが苦しこと、ぼくも苦しい」

部屋の外は、まだ大雨だった。ぼくは、アズミをぎゅっと抱きしめた。彼女の身体は、まだ少し冷えていた。

「アズミ、寒くない?」

「少し」

「布団に入れよ、アズミ」

「うん。亮平、ありがと」

アズミは、敷きっぱなしの布団の中に、そろそともぐり込んでいった。

「…亮平の匂いがする」

「やつか」

とぼくはアズミに微笑んだ。彼女のじぐわのすべてが、いとおしかつた。

「亮平、うちに来て」とアズミが手を差しのげる。
ぼくは、どうしようかと迷つてから、彼女の布団の横にすべり込んだ。

「…雨、まだ降つてゐるね」

「今晩はやまないだる」

「わたし、亮平のことが好き」

「嬉しいね」

「亮平は？」

ぼくは、答えのかわりにアズミに言つた。

「もし、ぼくがライオンなら」

「ライオンなら？」

「たくさん動物のなかから絶対、アズミを選んで襲う。ダッシュでがぶつと噛みつく」

「ふふつ。わたし、脚速いんだよ」

「でも、いまは弱つてゐる。弱つてゐる草食動物にかぶりつくライオ
ンは卑怯」

「そうなの？」

「そうなの。だからぼくはたとえライオンでも、いまのアズミは襲
わない」

でもそう言いながら、ぼくはアズミのまぶたに、わからぬによつて
そつと口づけていた。

「よく緊急電話してきててくれたね。ありがとう
エマージェンシーコール」

「だつて、わたしには亮平しか」

「…ぼくら、共犯者だもんな」

ぼくは、立ち上がりつゝもの睡眠薬を口にふくみ、それをアズミ
に与えた。

「ぼくはさつも、アズミを襲わないって言つたけど」

「うん」

「…少しだけ、嘘ついていいかな」

「…いいよ。少しだけなら……」

ぼくは、彼女の首筋にそつとキスした。

「二人でいるとあつたかいな、アズミ……」

「うん…亮平…」

ぼくは、両腕をアズミの背にまわした。彼女の、ぼくの背をつかむ指の力が、睡眠薬が効くにつれ、どんどん抜けていく。

そのままぼくらは、抱き合つたまま眠りについた。

「いつか薬なしで眠れる夜を、一緒に過ごそうね…」

降りしきる雨の音のなかで、ぼくは最後にそんな声を聞いたような気がした。

第九話（月明かりのなかで）

やがて3月の終わりが来て、アズミは20歳になった。真昼の午後、ケーキに20本のろうそくを立てて、ぼくはアズミにCDをプレゼントした。

僕がいま、練習しているHリック・クラプトンの曲だ。

「わあ、ありがとー」

アズミはさっそくそれを聴いた。彼女は嬉しそうに、「今度、亮平バージョンも聴かせてね」と言った。

「ところでわたし、タバコ臭くない? まえから、少しづつ吸ってるのよ」

「ぼくも吸うから臭わないけど」

「もう20歳だもんね。これで親にも堂々と言いくつてできるわ
ぼくには、タバコなんてどうでもよかった。ぼくはふいに、彼女を引き寄せてキスした。

彼女はかなりびっくりしたようだった。

「臭つてない、臭つてない」

「…つて、あーーーなによ、こまのちゅうど?...」

「あはははは」

彼女が焦つて紅茶をじぼじぼしてくるところへ、さりげなくぼくは追撃を加えた。

「だから、ぼくはライオンだつて言つたら」

「もし”がついてたでしょ、あのときは」

「つまり、可能性があるってことでしょ、もしもし、おねえさん?」

本気でアズミが、おもろいし始めたので、ぼくはこのへんでやめておこうと思った。

そのとき、ぼくのケータイが鳴った。なんだ、せっかくのここに畳下

がりに。

ぼくは、大げさにひきと口に出して、「もしもーし」と電話に応答した。それは、『ギター大好き!!の集まり』の常連ケンタからだつた。

「あ、亮平さん? ちょっとといいですか? 大事な話なんだけど」

「大事な話?」

「じつは、落ち着いてくださいね……あの……サヤさん、お亡くな
りになつたんです」

「えええ——?!」

ぼくが大きな声で答えたので、アズミが振り向いた。彼女は目をと
く、ぼくの表情を見てしまつた。

「おとといの晩、睡眠薬を大量に飲んで。眠っている間に吐いたも
のが気管支から肺に入つて、それで肺炎起こしたらしいです。そう
いう死に向つてあるんですね」

さらにケンタが続ける。

「コーディさん、ミルクと浮氣してたらしいですよ……」

電話を切つたあとでも信じられなかつた。あんなに、元気だつた人
が死んでしまうなんて。こんなに簡単に。

呆然とするぼくを、アズミが見逃すはずがなかつた。

「なに? なんの電話だつたの?！」

ぼくは、説明しないわけにいかなかつた。だが、そのタイミングを
誤つたかも知れない。

アズミのショックは予想以上だつた。

「うそ……！ サヤさん、いつかオフ会で会おうねって約束したのに……！」

「落ち着け、アズミ」

「コーディさん、どうして? ……ひどい……駄目、辛い、わたしも飲
んでしまつ」

「やめる、アズミ!」

あつと言つ間に、彼女はバッグを開け、自分のピルケースの中身をさりげらつと飲み込んでしまった。

いつたい、どんな薬が何錠入つていたかもわからなかつた。
ぼくは急いで、アズミを洗面台に連れて行き、口のなかに指を突っ込んだ。

ゲホゲホと咳き込みながら、彼女は胃の中のものを吐き出していた。
20歳のケーキの残骸が流れしていく。

「亮平、くるしい。やめて」

「だめだ」

もういいだらうといつといふまで、ぼくは徹底的にやつた。万が一
でも、彼女になにかが起こつて欲しくなかつた。
ぼくはもう、アズミなしでは生きていけない。そのことを、何度も
何度もあたまのなかで反芻していた。

「げほつ…げほつ…」

アズミの目から、涙が浮かぶ。

「よし、これで全部出たな」

ぼくは、アズミを抱きかかえて、部屋へ戻つた。

「おい、大丈夫か」

「……」

「アズミ？」

しばらく様子を見ていると、アズミは涙ぐんだまま、ぐつたりと眠りについてしまつた。ぼくも少し疲れを感じて、シャツをゆるめてそのままアズミのそばで横になつた。

ふと気がつくと、真夜中だつた。

月明かりのなか、ぼくの目のまえに、アズミのうるんだ瞳があつた。

「大丈夫か、アズミ」

「うん…」めん、亮平……」

「からからともなく、ぼくらは身体を寄せ合つた。アズミの田から、再び涙がこぼれた。

「あんなにいい人だつたサヤさんが、死んじゃうんだもん…」

ぼくは、彼女の背中をなだめるようこなすつた。

「悪いことをしているわたしたちは、きっと地獄に墮ちるよね…」

ぼくは、ぼくらは、死の恐怖から逃れるかのように、しつかりと抱きしめ合つた。

部屋の外には、薔薇をつけた桜の木があつた。

震えるアズミをあたためるために、ぼくはていねいに薔薇をひらくう、彼女をほどいていつた。

「亮平」とアズミがつぶやく。

ぼくは、彼女の唇に優しく口づける。

薔薇のなかには、白く染まつたアズミの肌が、小さくひろがつていた。ぼくの大きな胸をそこに重ねると、ふたりの鼓動がどくんと共鳴した。

大丈夫、ぼくらは生きている。なにも心配する事はないよ、アズミ。

このままふたりで死んでしまつても、地獄へ墮ちたりなんかしない。

第十話（同棲生活・1）

ぼくは結果的に、弱つた草食動物を力づけるライオンになつた。

アズミは翌日、大荷物を持って、ぼくの部屋にやってきた。

「わたし、家、出てきちゃつた」

「まじかよ？！」

ぼくはそのとき、食べかけていたバタートーストを落としそうになつた。

「親は？なんて言つてるの？」

「ケンカばかりしてる親に反対なんて出来ないよ。この場所は言つてない」

アズミは平然として言つた。信じていいいものか？

だけど、アズミだつてもう20歳だ。自分の行動には責任を持つてゐるだらう。

結局、彼女はぼくの部屋に住むことになった。

「そうだ。『ギター大好き！』の集まり』に報告しよう」

「なにを？」

「ぼくとアズミが、一緒に住み始めたことを

「えーー、なんか恥ずかしいなあ」

ぼくはパソコンを立ち上げ、チャットルームに入つて、『ギター大好き！』の集まり』のやつらに声をかけた。

『久しぶり』亮平

ケンタが挨拶してきた。

『サヤがいなくなつて、寂しくなつたな』

『そうだね。あれから、『ージもミルクも来なくなつたし。早くも別れたつて噂だけど』

『もう別れたのか、あいつら』

ぼくは、後ろの台所で不器用に包丁を扱いながら、豆腐を切つてい

るアズミに叫んだ。

「コード、別れたんだって。ミルクと」

「へえ」

「誰も連絡先は知らないって」

「そ、うなんだ

ぼくは、パソコンに戻つて書き込んだ。

『とにかく、ぼく、言わなきゃいけないことがあるのよ』

なんですか、改まりで

卷之三

『まじっすか！……♪亮平』

何人かのやつらが反応してきた。

『、（“- - -”）ノ。・・・＊ オメヂトオ

『おぬぢと、帆斗』

『もしもこれがただつたのか』

『亮平、一曲弾いていいよ』とケンタが書き込んできた。

ほぐす井戸一を取り出にてタケで書いた

「いや、ナナのためは”天国への階段”アダム・リチャードのそばに寄つてゐる。

ぼくは、彼女ここと二ツ笑ひかね

『8888888888』とたくさんの拍手をもひつたあとで、ぼく

は早々にチャットルームを出た。

「なんだ、歌詞、覚えてるわけじゃないんだ?」

とアズミがぼくの机の前のクリップボードに貼つてある、大量のコ

ビー紙を見て笑う。

「覚えられるわけないよ、英語なんだから」

「あはは。全然知らなかつたー」

「そ。ぼくはいつも、これ必死で読んで、きみにも聽かせてたの」
アズミは、クリップボードを埋め尽くしている、たくさんの歌詞をじっと眺めていた。

そして、ぐるりとぼくを振り向いて言った。

「ねえ、亮平。今度、わたしのためになにか弾いてくれる?」

「いいよ。いま練習している”Tears in Heaven”

を、あなたに捧げましょう」

アズミは、につこりと、ぼくをじきじきとさせむる笑顔を見せた。

ぼくは思わず、アズミの髪をそつとなでた。アズミが心地よさげに、ぼくに向かつて目をつぶる。

ぼくらは、長いキスをした。

窓の外からは、満開の桜が見えた。

春の訪れが、ぼくらを祝福してくれていようつだつた。

ねえ、亮平。サヤさん、きっと天国へ行つてるよね。..

アズミは、ぼくに寄り添つて、「いまがいちばん幸せ」と言った。

第十一話（同棲生活・2）

ぼくらは幸せに暮らしていたが、一人とも、これといった収入がなかった。

ぼくは、今まで、わずかな貯金と年金で暮らしてきた。

一人で生活すれば、そのうち貯金もなくなってしまうだろう。

「わたし、バイトすることに決めたわ」とアズミが宣言した。

「病気なのに、大丈夫なの？」

「大丈夫。わたしが働くから、亮平は家事をして。わたし、今まで全部お母さんにやつてもらつてたから、まともに料理も出来ないし」

アズミはさつそくバイトを始めたが、ぼくは、彼女の身体が心配でたまらなかつた。

ある休日の午後、アズミは死んだよつに青い顔で、畳の床に転がっていた。

アズミは、目を半分開いて起きた。

「……あ……寝てた……。どうしたの？ 亮平」

ぼくはホッしたが、心臓はドキドキしたままだつた。

「アズミ……。バイト無理してんじゃないか？ ぼくもバイト探すから、少し休めよ」

「駄目だつて。一人ともつぶれたら、おしまいじゃない」

「そりやそうだけど」

「大丈夫。これでもわたし、バイト先で重宝されてるのよ。英語が出来るからね」

でも、日増しに彼女の薬はどんどんと増えていき、その量はぼくが

見てもものす」と、ものになつてきた。「三三箱をのぞくと、そこには数々の薬のシートであふれかえっていた。

「アズミ、限界だよ。もうバイトやめろよ」

「いいの。亮平と一緒にいるためだもん。わたし、がんばるから」

「でも、アズミ……このままじゃ死んじゃうよ?」

ぼくは真剣に心配していた。

「やだあ、亮平。死ぬわけなんかないじゃない」

アズミは弱々しく笑つた。でも……ほんとうにこのままでいいのか?

「やめさせないと。いつか死ぬよ。」

ぼくは、サヤが生前、ぼくに言つた言葉を思い出す。

ぼくは、ぼくのなかで、不安の波が徐々に拡がつていくのを感じていた。

第十一話（突然の別離）

ぼくとアズミが同棲を始めてから2ヶ月が経つたある日のことだつた。

いつものなんでもない朝、ぼくはギターの弦を買いに、楽器店へ行つていた。

「お父さんに、家に連れ戻されたの」

最初、電話を受けたとき、ぼくはアズミの言つている「」との重大性が、すぐに理解できなかつた。

「なに、どういう」と？

「病院に行つたら、待合室にお父さんがいて」

「えつ？！……」

「それで、いま家にいるの。亮平のこととは言つてない
ぼくらは、ぼくの用事がすんだあと、病院の待合室で落ち合つ」と
になつっていた。

「お父さん、待ち伏せしてたのか」

「そうなの。…お父さん、なにも言わずに、わたしを車のなかに引
っ張つていつて」

「大丈夫？殴られなかつた？！」

「平手で一発…それ以後なにも言わないし、なにも聞かないの。
それが、余計」わくつて「
アズミ…」

「お母さんは困つた顔してゐし、わたし、部屋にいる」としか出来
なくて…」

「それで…」

「亮平、わたし…、しばらく外に出れないと思つ」

「…」

「亮平、『めん』

ぼくは、気をしつかり持て、と自らを励ましながら必死で言った。

「アズミ、大丈夫だよ。ぼくら絶対、近いうちに会えるよ」

「うん、亮平」

「なんかあつたら、エマージェンシーポール緊急電話してこじよ。絶対だぞ?」

「うん、亮平も…」

「ぼくらは、何があつてもちゃんとつながってるんだから」

「…「うん」…」

「泣くな」

そう言いながら、ぼくも病院の入り口で、人目もせばからず泣いていた。

アズミと突然別れることになつてから、ぼくは抜け殻になつていた。

アズミのいない部屋…。ぼくにとつて、それは辛すぎる。

ぼくは、アズミが残していった服や、マフラーなんかを、ときどき眺めてはそつと抱きしめた。

アズミ。早く帰ってきて。ぼくは痛むこじりを抱えて、毎日祈つていた。

「すぐ、そつちへ戻るから!」とアズミは電話やメールやチャットで、ぼくを励ましてくれた。

しかし、事態はそう簡単でもなかつた。

ぼくは、まず、自分が立ち直らなければならぬといふことを悟つた。

こんな、薬物中毒みたいな人間を、厳しい警察官の父親が、許すわけがない。

「おい。なんか、仕事ない?」

ぼくは、かつての同僚サカキに連絡した。

「らく〜な仕事が一つあるよ」とサカキは忙しそうに言つた。

「それ、頼むよ」

そしてぼくは、少しずつエト関連の仕事を始めたようになった。は

つきり言って、それはきつかった。ぼくは、ほとんど毎日のように出入りしていた『ギター大好き!!の集まり』にも行けなくなってしまった。

でも、それ以上に、ぼくには大事なものがあった。

アズミ、待ってくれ。ぼくは、きみを必ず、迎えに行くから。

第十二話（アズミの消息）

ぼくとアズミは、毎日連絡を取り合っていた。

しかしある日突然、アズミからの連絡が途絶えた。

「アズミ、どうしたんだ…？」

ぼくは、起きているあいだ中、気になつてそのことばかりを考えていた。

あの、厳しい父親が、彼女のケータイやパソコンをも奪つてしまつたのだろうか。

『最近、アズミ見てない？』

ぼくは、『ギター大好き！！の集まり』の常連たちに尋ねた。

『あれ？ アズミと一緒に住んでたんじゃないの？』亮平

『理由があつて家に帰つてるんだ、いま』

『えへへへ そうだったんだ』

チャットルームの常連たちは、急に興味をそそられたようだつた。
『連絡がつかないつて、そりゃケータイ、壊れたんだろ、ふつーに』
『じゃ、なんでこの部屋に来ないわけ？』

『パソコンもバットで殴られて、とか…』

そんななかで、ケンタがぼそつと書き込んできた。

『アズミちゃん、このまえ、なんかの曲をリクエストして帰つていつたよ』

『このまえつて、いつ？』とぼく。

『えつと、ここ2・3日前つて話じゃないな。いつだつたかな』

『とにかく、ここに来たら、ぼくが心配してること、伝えてくれないかな』

ぼくはそれだけをケンタに書き込んで、死にそうに疲れた身体を、布団の上にぱつたりと横たえた。

アズミ……、どうなっちゃったんだ? ぼくは心配でたまらない。きみの、元気な声が聞きたい。

頼むから、ぼくの電話に出てくれ。

だが、アズミからの返事は、さらに2日経つても来なかつた。

ぼくは、仕事どころではなくなつた。仕事を休んで、ぼくはアズミの所持品のなかから、彼女の住所の手がかりを探し始めた。

もう、なんだつていい。あのカミナリ親父にどなられたつて。念のため、ぼくは幽閉されているアズミのために、相当量の薬を用意していこうと思っていた。ひとつそり渡す機会があれば、これで彼女は眠れる。

「でも、今度会つたら

ぼくは、覚悟していた。

「もし、今度会つたら、ぼくは、アズミを奪つて帰るかもしけない

」

ぼくがアズミのゴートのポケットを調べていたそのとき、待ち焦がれていたぼくのケータイが鳴つた。

アズミだ! -

「アズミ、どうしたんだよ! -

ぼくはほとんど、ケータイに向かつて絶叫していた。

「心配しただろ! -

だが、電話に出たその声は、アズミとは別の女性の声だった。

第十四話（アズミからのメッセージ）

ぼくは、薄暗い部屋のなかで、電話の内容をひとつひとつ想い出す。

「行徳亮平さんですか？」

電話の相手は尋ねた。

ぼくは「… そうですが…」ひとまざいつ。

「わたくし、篠田アズミの母でいらっしゃいます。行徳さんにお伝えしたいことがあります」

ぼくの心臓は、これまでにないほど、ビクビクと波打っていた。いつたいなにが始まるんだ？！

アズミの母親は、一息ついてから言った。

「失礼ですが、行徳さんは、うちの娘とお付き合いでいたのでしょうか？」

「……はい。いま、しています」

ぼくの緊張は、頂点にたかまっていた。

「そうですか。…じつは、アズミは6日前の深夜、亡くなりました」

「えっ？」

その後、ぼくは、自分がなにを言ったのか、よく覚えていない。ただ、

「どうしてですか？」「ほんとうに？」をバカみたいに繰り返していたように思つ。

「アズミは、5日前の早朝、自室に面したベランダで倒れているのが見つかりました」

「解剖によると、心臓麻痺だったそうです。自室には食べたあとのカップラーメンが残っていました」

「おそらく、深夜眠れずラーメンを食べたあと、ベランダへタバコを吸いに出たのでしょうか。わたしたちとしても、ほんとうに残念な

気持ちです。」

ぼくは、焦點の合わない目で、テーブルの上の睡眠薬の山をぱーつと眺めた。

アズミがこの世にもういらないなんて、3日経つたいまでも、まつたく信じることが出来ない。

「アズミの机を整理していましたところ、いちばん目につく最上段の引き出しに、メモ書きがありました。『万が一、わたしが死んだらこの人に連絡してください』と、そこに行徳さんの連絡先が書いてあつたんです。それで、行徳さんにお電話させていただきました。」

アズミが、自分の死期を悟っていたというのか？いや、そんなことがあるはずがない。

でも、彼女が飲んでいた薬の量は、確かに、いつ死んでもおかしくないくらいのものだつた。

「ぼくが悪いんだ」

ぼくは、部屋のなかでひとりつぶやいた。

「ぼくが、アズミを止められなかつたから……」

ぼくは、胸にこみ上げてくるものを抑えきれずに、ふたたび、大声で吼えるように泣き始めた。

アズミ、ぼくのいちばん大事な人。

もう、きみに、ぼくは緊急電話を出来ないの？

薬に依存は駄目だけど、わたしに依存ならうれしいわって、きみは言つたじやないか。

ぼくは、きみに依存していた。

きみだけを愛していた。

アズミ…アズミ…。

まだアズミの匂いの残るクリーム色のコートを抱きしめながら、ぼ

くの胸は激しい痛みと悲しみでぐしゃぐしゃになつた。

……何時間、そうしていたかわからない。

やがてぼくは、涙も枯れたうつろな目を上げて、壁のクリップボードを見た。

そこには、Hリック・クラプトンの歌詞があった。

それは、ぼくがアズミに歌つてあげるはずの、あの曲だった。

"Tears in Heaven" ..

「ぼくは強くなくてはならない、このまま生き続けなければならぬい。

ぼくは天国にいられる男じゃないから」

その紙は、まるでなにかの暗示のようにぶら下がっていた。
神さま、これはアズミからのメッセージでしょうか？

第十五話（再会）

誰もが、ぼくを遠巻きにして見ていた。

昨日の、《ギター大好き！！の集まり》でさえそうだった。

『アズミ…死んじゃうなんて…』

『なんか言動おかしいよ？』亮平

『亮平、寝てないんじゃないのか？もつと落ち着いてから話やうとケンタまでもが言った。』

そのとき、誰か知らない人物からメッセージが届いた。

驚いたことに、それは「ージだつた。彼は、ハンドルネームを変えて、このチャットルームにやつて来ていた。

『アズミは残念だつたな』

ぼくは、彼がなにを言い出すのかと身構えた。

『みんなには信じてもらえないだろ？けど』と「ージは切り出した。

『俺は、サヤのことをいちばんに想つていたんだ』

「……」

『でも、俺はそこらじゅうの女に声をかける悪い癖があつてな。じつは俺らしくないけど、彼女が死んだあと、俺は走る車に飛び込んでしまつたんだ』

『え』

『酔つてたんだよ。それで、頭を打つて病院で意識がないとき、あの世でサヤに会つた。周りは夢だらうつて言つけどほんとだよ。彼女はぼくを許してくれたかのように、ぼくに手を振つてくれたんだ』

『だ

『うなのか……』

『すまん。一言、なにか言つたくてな』

『それじゃあ、ぼくも、死ねばアズミにまた会えるんだろうか？』

ぼくは、ふと我に返つた。

そして。

ぼくは、アズミのもとへ行くために、テープルの上の睡眠薬を飲み干していった。

……ぼくは、とてもなく、美しい場所にいた。

いちめんの、黄金色の花の咲く野原。日のまえには、一筋の道がかった。

ぼくは、なにも考えず、ただ、ふわふわとその道を歩いていった。ふいに、田の前にキラキラと光る川が現れる。ぼくは、驚きで田を見張った。

川の向こうに、アズミがいる……

「アズミ———！」

ぼくは大声で叫んだ。

アズミは口で「亮平」と言つたが、その声は聞こえなかつた。アズミは、やさしくぼくに手を振つてくれた。柔らかな、その手つき。

ぼくは、アズミのもとへ行こうと、川に向かつて走り始めた。よく見ると、アズミの横に、ギターを抱えた女の子がいた。

「サヤ？！」

ギターを持った女の子はこくんとうなずいた。

「サヤー——！」「——ジとここで会つたのか——？！」

彼女ら二人は、すべてわかっている様子で、うんうんと笑つてうなずいた。

ぼくは、アズミを抱きしめたい一心で、急いで川のなかへ入つていった。アズミは、ぼくを見て、少し困ったかのような笑顔を浮かべた。

「まだ」とアズミの口が動く。

「まだ？！」

「まだ、駄目」

「駄目って、なんだ？！」

アズミが、いたずらっぽい顔でぼくの後ろを指す。そして、またあの柔らかな手つきで、ぼくに手を振った。

そのとき、巨大な力がぼくの背中を引っぱり、ぼくは、いきなり暗いトンネルのなかへ飲み込まれていった。

「アズミッ……！」

第十六話（目覚め）

ピッピッピッピッ…と電子音がする。

「覚醒しました」と、誰かがパタパタと駆けていく音がある。

なんだ？ アズミはどこへ行っちゃったんだ??

ぼくはわけがわからず、呆然としていた。

「行徳さん、わかります？」

と医師らしき人が、ぼくに尋ねる。

「あなたは！」自宅で倒れているところを、警察官に発見されたんですね

「あなたの仕事先の人が、何度も電話しても通じないって通報したんですよ。無茶はいけませんよ」

ぼくは、肺炎にかかっていた。

大量の薬が、気管支を通じて肺に入ってしまったのだ。ぼくは、はじめて、自分が死にそこねたことを知った。

「アズミが、まだ早いって言ったんだ…」

ぼくの口元に注目した看護師の女性に、ぼくは軽く首をふった。

ICUを出て一般病棟に移ると、窓の外から、太陽の下で燃える緑の木々が見えた。

「そういえば、胸が痛まないな…」

ぼくは、不思議な思いで、自分の胸を押さえてみた。

もちろん、肺炎の痛みはあつたが、それといままでの激痛とは、まったく異なったものだった。

ぼくを長年、苦しめてきたあの痛み。

あの胸に突き刺さった壊れたガラスの破片が、肺炎と一緒にどこかへ流れてしまったのだろうか？

ぼくは結局、3ヶ月間入院していた。

「びっくりしたよ、もう。調子はどう？」

とサカキが見舞いに来てくれた。

「もうすぐ退院できるってさ」

「仕事の方は、続けてやれるようにならねばならないからな。早く元気になって復活しろよ」

超忙しいくせに、サカキは面倒見のいいやつだ。ぼくは、彼にこうからお礼を言った。

窓の外からやつてくる、さわやかな風が心地よい。

ぼくは、時折、"Tears in Heaven" をヘッドホンで聴いた。

これはアズミからのメッセージだ。

「ぼくは強くなくてはならない、このまま生き続けなければならない」

そうだ、アズミ。

どんなことがあっても、ぼくは。

第十七話（最終話）

退院してからすぐに、ぼくは《ギター大好きーーの集まり》に顔を出した。

『亮平――――!』

『退院ヽ(〃'-'〃)ノ。・・・＊ オメデトオ』

『もう、大丈夫なのか??』

ぼくの入院のことは、ケンタを通じて、みんなが知っていた。

『じつは、みんなで反省してたんだよ。アズミちゃんが亡くなつたとき、もっと亮平になんか言つてやればよかつたつて』

『大丈夫だよ』

ぼくは笑つた。

ミルクもいた。彼女は、おずおずと『オメデト』と書いてきた。

ぼくも、『アリガト』とかわいく書いておいた。

『あつ、そうだ!』亮平

唐突に、ケンタが書き込んできた。

『アズミちゃんが最後に来た日にリクエストした曲、思い出したよ。エリック・クラプトンの』

『"Tears in Heaven"だろ?』

ぼくは、小さく笑つてしまつた。

これは、アズミからのプレゼントだ。そう思った。

アズミが亡くなつてから、ぼくは彼女に線香の一本もあげていなかつた。アズミの両親から、ぜひ来てくれと言っていたが、なぜかずっと保留にしていた。

たぶん、自分のなかで、アズミの死を認めたくない気持ちが、まだどこかにあつたんだろう。

「よつこわ。じつわ」

アズミの両親は、一人娘を失つて、絆を深めたかのようだつた。ぼくは、彼らに招かれて、アズミの遺影のある部屋へ入つた。そこには、満面の笑みを浮かべるアズミの姿があつた。

ぼくは、線香をあげて、アズミに手を合わせた。

「アズミ。ぼくのこと、これからもずっと見ててくれよ。…」

ぼくは、じいろのなかで、彼女の手をぎゅっと握つた。

外へ出ると、そこには十一月の高い空が、田もくらむほどに大きくひろがつていた。

あのどこかに、アズミはじるんだろうか。

アズミは、ぼくに生きていかなきやいけないんだと教えてくれた。

ぼくは、いつのまにか、あの曲を口ずさんでいた。

ぼくらは、いつでも会える場所にいるんだ。

アズミ、好きだよ。

あのとき、ぼくに手を振つてくれて、ほんとうにありがとう。

(ア)

第十七話（最終話）（後書き）

一度完結してから、第十六話が完全に抜けていたことに、9日も経つてから気がつきました。その間、読んでくださった方は、なんのことかわからなかつたのは…。反省です。悲しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4609d/>

Tears in Heaven

2010年10月14日01時54分発行